研 究 会・シンポジウム報告

2014 年 4 月 26 日（土）　定例研究会報告
テーマ：　日中・日米関係から見た日本外交
報告者：　田岡俊次（ジャーナリスト）
時　間：　14:00〜17:00
場　所：　神田校舎 13A 会議室
参加者数：約 40 名
共　催：NPO 現代の理論・社会フォーラム
報告内容概略：

本年（2014 年）4 月 23 日から 25 日に「国賓」として訪日したオバマ米大統領が、安倍首相との共同声明で、日米安全保障条約は「尖閣諸島を含め、日本の施政の下にある全ての領域に及ぶ」「米国は、尖閣諸島に対する日本の施政を損なおうとするいかなる一方的な行動にも反対する」としたことについて、マスコミは大々的に取り上げ、日本政府は中国包囲網ができたとした。その直後の本研究会において、気鋭のジャーナリストであり、軍事・外交評論家でもある田岡俊次氏は、冷え切っている日中関係を見据え、日米関係の現状と将来について、透徹した議論を展開した。

田岡氏は、米中両国は、相互尊重・相互協力に基づく「軍事面で新型大国関係」を確認しており、現在から将来にわたり、米中は互いに対立するどころか、その親密性を高めていくと主張した。米国（オバマ大統領）は、日本に、尖閣問題や歴史認識問題に関わる対中国敵視政策を「慎め」と言っているのであり、それは昨年 12 月の安倍首相の靖国参拝に対し「disappointed（失望）」という怒りの感情を交えた言葉に表れているとした。

また田岡氏は、今や米国は、中国は重要なパートナーと考えており、財政再建、輸出の倍増が焦眉の急の国家目標になっているオバマ政権からすれば当然のことであろうとする。なぜなら、中国は、米国にとっては、米国債の最大の保有国であり、最大の輸出国（市場）だからである。中国にとっても同様で、米国は、最大の輸出市場、投資先である。また、軍事面でも、米国は、中国軍との人的交流などの信頼醸成に努めている。

さらに、田岡氏は、海洋進出など中国脅威論に対し、具体的に、中国の空母の数、潜水艦の数や能力について説明し、米国は中国の海軍力を全く脅威とみなしていないとした。

これに対し安倍首相は、「資本主義対社会主義」という冷戦時代の世界観から脱しえておらず、「日米同盟強化」で中国に対抗し、「中国包囲網」を作ろうとしている。田岡氏によれば、現在の東アジアの政治情勢は、日米の「中国包囲網」どころか、米中両国による「日本包囲網」という様相を呈しており、安倍首相の歴史認識と現実を直視していない外交政策を厳しく批判した。

記：専修大学法学部・内藤光博

2014 年 5 月 20 日（火）　定例研究会報告

テーマ：　文化くらし面担当者が見た福島

報告者：　山田　佳奈氏（朝日新聞東京本社文化くらし報道部記者）

時　間：　15:00～16:30

場　所：　生田校舎 10306 教室

参加者数：18 名

報告内容：

朝日新聞東京本社文化くらし報道部の山田佳奈記者をお招きして、「文化くらし面担当者が見た『福島』」というタイトルでお話いただいた。山田記者は現在、東京本社文化くらし報道部の遊軍記者として多方面に活躍中である。

山田記者が、朝日新聞大阪本社生活文化部記者時代に東日本大震災が起き、応援記者として 3 月 13 日より南相馬市で取材を重ねてきた。社の方針で駐在する形での取材は長期間できなかったが、その後も断続的に取材を重ねてきた。

福島県を離れる際の気持ちを山田記者は、「（大阪から）福島へ勝手に来て、勝手に（大阪へ）帰ることは申し訳ないと感じた」とおっしゃっていた。

また、取材中に「放射能なんて浴びにこないでいい。帰りなさい。」と言われたことや被災地の方々の取材はいつまでかという問いかけに、「決まっていないが被災者の最後の一人の住処が決まるまで、取材しようと思っている」と語っていたことが印象深かった。

学部学生に公開し、女子学生を中心に多くの参加があった。質疑応答の際には自身が朝日新聞社記者になるまで曲折があったことを振り返られ、学生に対して就きたい職業への向かい合い方のアドバイスが送られた。

最後に、山田佳奈記者は昨年亡くなられた天野祐吉さんのロングラン連載コラム「CM 天気図」の最後の担当記者で、以下のような逸話を持っていることを付記する。

以下、紙面より。

思い切って「毎週、原稿を頂きに上がりたい」とお願いした。天野さんはちょっと驚いた顔をして、「何時に書き上がるか、そのときによって違うから。会う時間はまた別につくるから、メールで送ります」。「私ごときが厚かましいお願いだったな」と反省した。亡くなられてから、「今度の奴は面白いよ。昔はみんな、原稿取りに来るのが当たり前だったんだから」とおっしゃっていたと聞いた。元気があると感じて下さっていたらしい。少しでもお目にかかって話を伺いたくて、ラジオの収録現場に連れていって頂いたり、お菓子を持って突然、訪ねたりした。でも、もっともっと学びたかった。「謦咳に接したい」という言葉がぴったりだった。最後まで忙しくされていたので、時間はこれからいくらでもあると甘えていた。

記：専修大学経営学部・佐藤康一郎

2014 年 6 月 3 日（火）　定例研究会報告

テーマ：　ベトナムにける日本のマンガ理解の現状：日越の比較から

報告者：　ハ・ティ・ラン・フィ氏（ベトナム社会科学院東北アジア研究所）

時　間：　15：00～17：00

場　所：　社会科学研究所会議室

参加者数：11 名

報告内容概略：

日本発のポピュラーカルチャーである「マンガ」は、市場経済に踏み出したベトナム社会において熱狂的に受け入れられはじめた。経営の行き詰まっていた国営の出版社が 1990 年代に売り出したのが「ドラえもん」であり、これは同社の経営回復に大きく寄与した。

報告者はベトナムにおけるマンガの受容のされ方とその影響力について説明した。その受容層は、青少年に限定されている。マンガ読書についての大人や社会の評価は、必ずしも好意的なものではない。マンガは子供の読み物であり、青少年の健全な発達にネガティブな影響を与えると考えられているのである。しかし大人たちの思惑とは別に、若い青年層はコスプレを楽しんだり、マンガグッズを購入したりしている。

一方で日本におけるマンガの文化と市場は成熟化している。マンガの読者層は広い範囲にわたり、そのジャンルも幅広い。そうしたマンガ文化をこれからのベトナム社会がどのように受け入れていくことができるかどうかが、報告者の関心である。

質疑・討論はベトナムの社会や文化をめぐって多岐にわたった。そこで報告者と聴衆の理解を阻む壁は、日本マンガには戦前からの歴史があり、アニメやゲームなどへ幅広い文化的影響を与え続けてきたのにたいして、ベトナムではようやく 1990 年代以降に少年少女文化として移入されたにすぎない。このことが両者のマンガとその周辺領域についての理解の相違として議論に現れていたように思える。いずれにせよ急激な市場化や近代化が今後のベトナム社会にどのような影響を与えるのかを予測させる興味深い報告であった。

記：専修大学人間科学部・嶋根克己